

「おかあさん作家」といわれて



八木田 宜子

うちの男の子が三歳のとき、夜の空の雲を見て、いいました。

「あれはねえ、どろの雲よ」

また、やはり同じころ、お祭りでヨーヨー（小さい風船の中に水を入れて輪ゴムでさげたもの）を買ってもらい、片方の手に二つぶらさげて、階段をあがってきた。

「ヨーヨーたちが、あばれながらくるう！」とききびながら……。

どこのお宅でも、子どもが思わぬおもしろいことをいうのを聞いた経験があたりでしょう。

子どもは詩人だ、といいます。もっとも、心理学者に

いわせると、詩人などというのはとんでもないことで、子どもはとぼしい知識・経験の中から現象を説明しようとするため、時にはおとなの意表をつく表現にもなるんだそうです。

でも、ついこのあいだまで赤ちゃんだった幼児が、自分のとぼしい知識・経験を総動員してまわりの出来事を解釈しようとするのは、何とすばらしいことではありませんか。

生まれた時には目も見えず口もきけず、おとなが世話をしなくては死んでしまう、人間の赤ちゃん。その赤ちゃんが、小学校へ行くまでのたった六年くらいのあいだに、実におどろくべき成長をとげるのです。ただ

漫然と大きくなるのではありません。自分から伸びよう伸びようと必死の努力をかさねて、成長していくのです。おとなのいうこと、することをまねし、おとなにうるさがられながら「なぜ?」「なぜ?」を連発し、興味をいだいたものは長時間観察し、試行錯誤を大胆にくりかえして、大きくなっていくのです。

よく地面にしゃがんで、何かじっと見つめている子がいいます。まだ髪の毛がふわふわしていて、肩のところはかわいらしい丸味をおびている子。何を見ているのでしょうか。その小さい心で、いったい何を考えているのでしょうか。口で表現することはできなくても、頭の中では、おそらくさまざまな思いがめぐるしくうずまいているのではないかしら。

私、実は、自分に子どもができるまで、幼児のことはあまり考えたことがなかったのです。ましてや、幼稚園にはいる前までの子どもは、私にとってまだほんの赤ちゃんで、どうてい人間らしい存在とは思えませんでした。ところが——です。

今の私には、口がきけはじめてから幼稚園の二年保育にはいる前くらいの、つまり二歳〜四歳ぐらいの幼児こ

そ、人生でもっともすばらしい存在ではないかと、思っています

全身これ好奇心のかたまりで、ひたすら対象物にせまっていくな子ども。自分が得たものすべてをぶつけて、新しいものを引きこんでいく子ども。二歳〜四歳ぐらいの幼児の生活は、毎日毎日が生きる緊張でびしょっと張りつめています。私はそのひたむきな目つきに、非常な感動をおぼえました。彼らこそ、まさに「人間」そのものです。おとなよりずっと人間らしい人間です。

五歳をすぎるくらいになると世界が広がるせいとか、また、人間には生まれつきなまけぐせもそなわっているためか、子どもの緊張感はぐうっとゆるんでくるように思われます。

児童文学の一つの大きなテーマが、成長期の人間を描くことにあるならば、二歳〜四歳ぐらいの幼児を描いたすばらしい作品が、もっと生まれてもいいはずだ。そういう作品を、子どもにも読んで聞かせたいし、自分も読みたい——そう私は思いました。

また、この期の幼児のはげしい知識欲にあげんとした私は、いったい人間にとって知識とは何なのだろう、と

考えざるをえませんでした。彼らには、知的なものと情的なものとの完全な一体感があります。知識を得たときの心からの喜び……。おとなは、えてして知と情とは別のものと考えがちで、学校教育をうけるようになった子どもも、そう考えるようになっていく。しかし、そのもっとも原初的なすがたは知情一体なんだわ。

幼児のために知の喜びをうたいあげる本、新鮮なおどろきのうちにおのずから自分で知識し整理していく方向へ進むような本、そういう絵本がほしいと思いました。

いまでこそ幼稚園にあがる前の幼児のためにつくられた本はいろいろありますが、つい二年くらいまえまでは、この手の本で、おとなが心をこめて書き、えがいた本は、ほとんどなかったのです。

さて、私が子どもの本の編集者をやめて、もの書きのはしくれになったころ、まさにこういう本を書かないかというお話がありました。「二―三歳児でもわかる、知識性を裏に秘めた創作絵本」というのです。

私は大学にはいつてから今日までずっと、子どもにつ

いての勉強をし、子どもの文化にかかわってきましたが、創作をしたことは、いっぺんもありません。しかし、他にあまりないものなら私がやろうと、大胆にもお引きうけしてしまいました。一シリーズ全部をやらせてくださるというので、数、色、ことば等々、テーマをわけて整理していくと、十二冊になりました。

二―四歳の子どもの生き生きとした心をくみあげる本、子どもがむちゅうになってよろこんでくれる本、たのしんでいるうちに、はつきりと“何か”をくみとってくれる本……そんな本が簡単にできるはずはないので、はじめた瞬間にもうガクゼンとして、煙のように姿をけしだい気持ちになりました。

「生き生きとした心」なんていつて、ひとりで感心しているうちはいいのですが、この期の幼児がどう考えているのか、はつきりとはわからないのです。彼らは、心のうちをほとんどことばで表現できません。そして、いや、そのために、このくらいの幼児についての実践記録や研究書は、おどろくほど少ないのです。何もかも手さぐりで、おとなの推測でやらねばなりません。児童文学は書き手がおとなで読者は子ども、その書き手と読み

手のあいだにあるいろいろな意味でのギャップは、常に問題になるのですが、おそらく、それがいちばんはなだしいのが、二、四歳の子どものための文学です。

また、数なら数、色なら色が、人間にとっていちばん最初にどういう意味をもつか、ということを教えてくれる本も、ほとんどありません。

客観化しようと思ってもなかなかできないので、つい自分の子どもや、そのまわりの子どもたちの観察にたよることになりました。私は、「母親」としてより、むしろ「幼児に共感をおぼえるおとな一般」の立場で書いたつもりなのですけれど、できあがってみると、「母親の手づくり」だの、「おかあさん作家」だのといわれてしまったのは、そういうところにも原因があると思われるます。

私はしまいに、こう考えました。子どもたちの内面にせまろうと思っても限りがある。せまっていたところで、それで彼らがよるこぶともかざらない。ギリギリのところまでせまる努力をした上で、それをふりきり、あとはおとなの自分の心を、みずみずしく飛躍させることにつとめよう――。

と書くと、簡単なようですが、実はこの心境に到達するまでに、さまざまな紆余曲折があったのです。

おもしろいことに、これでわかるかしら、こうしたら喜ぶかしら、こういうことを教えたい――と、頭の中であれこれねまわした本よりも、自分の心のおもむくままにすなおに作った本のほうが、子どもは喜んでくれました。

私の親せきの家の庭に、ものすごく高いケヤキの木があります。食堂ののきさきにはえているのです。空にむかってすうーと伸びていて、ま下からふりあおぐと、まるで「ジャックと豆の木」の豆の木のようにな、楽々と天までとどきそうです。この家に、うちの子と同一どしのかわいい男の子がいます。自分の家の庭に、そんな高い木があったら、子どもはどういう気がするだろう……きつとのはってみたいだろう、のぼってみたいだろうなるか。のぼるにしたがって下のけしきがかわっていくだろう。一メートルくらいの背丈の子は、一メートルの世界でくらしている。高いところからものを見るというのは、子どもにとって新しい観点ではないかしら。……東京タワーより高くなるのぼったら、富士山より高くなるのぼったら、

と、話は心の中でどんどんエスカレートしてきて、とうとう『のぼっちゃう』という絵本になりました。

またある日、うちの子が、両手をつつにして片目にあてて、「おかあちゃん、見見える」といいました。私もまねをして、両手を片目にあて、「渾くん見見える」といい、ついでそのまま視線を移動していくと、郷土玩具のだるまさんが視界にはいつてきました。せまい視界の中で、だるまさんの赤い色は、ぱつと鮮明に輝きました。

これだ／＼と思いました。かぎられた視界の中で、色は印象的に見える。遊びとつながる要素もある。色の本はこれでいこう。望遠鏡だけじゃつまらない。両目で見る双眼鏡、上をあといで天体望遠鏡、下を見てけんび鏡……と、またまたエスカレートしてきて、できた絵本が『みえるみえる』です。(双眼鏡等のことは入れませんでした。子どもが両手で望遠鏡をつくって見ているクローズアップで「みえるみえる、あかいものがみえる」次のページに赤いだるまのアップで、「だるまさんならんであつぷつぷ」という調子です)

ようやく十二冊できあがった本をならべて私は考えま

した。最初はえらい抱負だったけど、結局自分がひとり相撲で作ってしまった。児童文学における書き手と対象関係って、いったい何なんだろう。……。

でも私は、これからも、二、四歳くらいの幼児のひたむきな態度を、私なりに追求していきたいと思っています。そして、生きにくいこの世に生きるということがどういうことなのか、人間っていったいどういう動物なのかと考える、一つの基点にしていきたいのです。

(絵本作家)

―やぎた・よし子さんは東京大学教育学部ご出身の絵本作家です。編集会議の折、いろいろな分野の方からひろく書いていただく、ということでした。話し合いました。その中で本田先生が、「やぎたよし子さんとおっしゃる絵本を書いていらっしゃる方は、とても子どもの心をよくわかっていらっしゃる方のように思える」とのご意見が出て、さっそくお願いしましたところ、こころよく書いてくださいました。―